

私の追い求める琉球ゴールデンキングスの将来像は現状よりも、もっともっと大きなものです。私は常にキングスの未来を頭の中で描いています。私がキングスの未来像を描けなくなった時、キングスのリーダーとしての責を譲るべき時だと決めています。

振り返れば2005年にプロバスケットチームを設立しようと来沖してから、10年近くが経とうとしています。当時は、全てが夢物語でした。誰もいない県内の会場施設に忍び込み、目を閉じ、耳を澄まし、客席が観客で埋め尽くされ、声援がなり響いている情景を想像したことが幾度となくありました。確かに何もありませんでした。「これを絶対に実現させるんだ」という自分自身を駆り立てるロマンだけはありました。

さて今季の琉球ゴールデンキングスは、ここまで勝率8割を超え、過去6年間で5度目の西部地区優勝へ向けて独走中です。「常勝」を名乗るに恥じない戦績を収めているキングスですが、1年目は地区最下位。沖縄開催のホームゲームに限れば5勝17敗でしたので、今季のホーム成績が17勝1敗（本原稿執筆時点）ですから、今では想像することが難しいくらいです。

1年目の入場者数は36,938人でしたが、以後着実に成

長を続け、7季目を迎える今年度は100,000人を超えるペースで推移しています。これは1試合平均に直しますと3,000人強となります。今では嘘のような話ですが、初年度には観客数僅か973人という悲惨な公式戦も実際にありました。あの頃は、試合当日に観客席を見るのが本当に怖かったです。ガラガラに空いた客席スタンドを見るのが、恐ろしかったですし、今こうして思い出すだけでも寒気がするくらいです。

観客数の話になりましたが、キングスには成長の余力があると思っていますが、いかにせん県内に3,000名以上収容の屋内施設がありません。「稼働率」つまり観客動員数を観客収容可能人数で除することで導かれる数字が100%超となっており、分かりやすく表現するなら「飽和状態」となっています。超となっているのは、立ち見の人数をカウントしているからです。

そこでよく聞かされるのが「沖縄コンベンションセンターが県内で一番大きな施設で5,000名収容」という主旨のことですが、実はバスケットボールの試合で使用する際には、28m×15mのバスケットボールコート会場施設の中央に配するため、当然のことながら、この部分に客席を設置することができません。ですからコンベン



## 「理想はまだこんなものではない」

沖縄バスケットボール株式会社  
代表取締役社長

木村 達郎

地域の目  
series 35



ションセンターといえども、実際には県内の他の施設と同規模のおよそ3,000名しか収容できないのです。

もう少し大きな会場で試合を開催したい、と思うのは当然のことです。ですから、キングスの潜在能力は「こんなものではない」と思うのです。

ところで私たち琉球ゴールデンキングスは「沖縄をもっと元気に！」という活動指針を掲げています。これは我々の活動を通じて、人々を精神的に元氣付けるという意味でもありますが、経済的に地域社会を活性化するという意味でもあります。人が動くことで経済効果は高まります。りゅうぎん総合研究所の試算によりますと、2007年度が8億円、2008年度が16億円、2011年度が25億円となっており、キングスの成長と比例して、沖縄の地域経済への貢献度も増加しています。

キングスのさらなる成長のためには、より大きな会場施設が不可欠な状況となっています。これまでの成長の軌跡を勘案すると、6,000人規模のアリー



ナが求められているように思われます。もちろんこのアリーナはキングス専用ではなく、コンサートや観光関連の幅広い用途において様々なイベントに使われ、地域を活性化する拠点となるべくものです。

人間が時間を共有する空間……。多くの人々が同じ場所に集い、同じものを観て興奮し、熱狂し、感動し、心を躍らせる、そんな時間を共有できることが琉球ゴールデンキングスの沖縄における役割の1つだと考えています。

2005年には「プロバスケット」を創るという話自体が夢物語でした。同じように、今から数年後には、より多くの人々が集うアリーナの存在が当たり前の世界となっていることでしょう。